

条件句を承接する「連体なり」構文の構造

重 見 一 行

「連体なり」⁽¹⁾構文の構造については、先学の論があり、⁽²⁾筆者も私見を披開してきた。⁽³⁾本論は八崎蛤日記⁽⁴⁾を資料として、前稿の主述句を承接する構文⁽⁵⁾に対して、もう一つの特徴ある構文としての、次例⁽²⁾のごとき条件句を承接する構文について論証せんとするものである。「連体なり」文の基本的な構造についての論証は、前二稿にゆだねる点の多い事を御了承いただきたい。

—

(1)さすがにこゝろにしまかせねばからうじて九月におもひたつ (163 P)

(2)かなしとおもひいりしもたれならねばしるしをくなり (115 P)

この二つの構文は、共に「ば」で結合された前句と後句の関係が松下大三郎氏分類の「拘束格の必然確定」にほぼ相当し、いずれも前句が後句の原因理由の提示になっている。それでは、(2)は「なり」を末尾に有する点において、いかなる相異を有しているのであろうか。特に「情報」という観点から、その構造的特性を明らかにしてみたい。

二

まず、(1)の表現している情報的構造を考えてみよう。

この前接文言は、「かくてとしごろ願あるを、いかで初瀬にとおもひたつをたゞむ月にとをもふを」である。初瀬の御参りを、たゞむ月——八月に計画したが、そう勝手にもできなくて、やっと九月に思い立ったというのである。前句の「さすがに」は前接文言を受けながら、その文言のごとくにならぬ事を述べ、後句はまた、前句の思いのごとくならぬという理由の故に「からうじて」九月に目的を達する事となつたと述べている。かく考えると、前句と前接文、後句と前句は、所謂「文」としての独立非独立はありながら、いずれもより後の文言はより前の文言に情報的に限定されながらも、より新しい情報の提供となっているのである。勿論、かかる確定条件法にも様々の場合があり、

(3)手まさぐりにあけてみれば人のもとにやらんとしけるふみあり (116 P)

等のごとく、所謂偶然確定と言われる、前句と後句の結合性の薄い場合もある。しかし、いずれの場合も、基本的には山田孝雄氏が「合

「文」と名付けて、「形は唯助詞によりて結合せらるゝに止まり、その接続を除く外は更に互に形式上の影響をなすことなきを本体とす⁽¹⁰⁾」⁽¹¹⁾と言われたごとく、文相当の句と句の連接と見るべきものとすれば、その両句の親疎関係は内容的なものにすぎず、文法的形態は同一であり、前句と後句が、言語表現における時間の進行軸に沿った線条性 (linearity) に従っているものと考えられる。その点で、後句が前句に比して、より新情報を記述提供しているのは理の当然と考えられるのである。⁽¹²⁾⁽¹³⁾

三

それでは(2)は、かかる点においていかようになっているであろうか。

これの前接文言は、「身の上をのみする日きにはいるまじきことなれども」である。つまり、西宮左大臣源高明の太宰府流罪という事件にいたく関心を引かれた作者が、その事件について日記に記した事に対する釈明である。その記した章段の最後に、何故かかる釈明を付したかという事を考えてみると、この日記のこの事件記事を讀んだ者が、女の日記(の故か)にかかる政治的記事を記した事を妙に思うであろうと懸念したからであろう(かかる点からも、この日記がある程度公開される事を予想して書かれた事が判明する)。そうすると、後句の「しるしをく」というのは、「これからしるしをくつもりだ」ではなく、「御覧のごとくしるしおいたのだ」という事である。この(2)の文の前まで読んで来た読者が「しるしを」かかれている事に気付いている事を前提にした上での釈明という事になる。かく考えると、この「しるしをく」というのは、ここで初めて

読者に提供する新情報ではなく、すでに先に読者の得ていると作者の考える旧情報の言語化による確認だという事になろう。その意味では、従って必ずしもわざわざ繰返して確認するまでもない情報と言えよう。従ってまた考えてみれば、この(2)の文の記述目的は、その「しるしを」いた理由に釈明に前句を記述する事にあつたわけである。そこを新情報として記述する事に意義があつたわけである。その故にここは、

(2) かなしと思ひ入りしもたれならねばなり
とのみしても、一応は意味の通ずる所である。事実、かかる「しるしを」表現も多い。

(4) それもおなじおもふべき人なればなりけり (148 P)

(5) ことしは五月二あればなるべし (173 P)

かく検すると、この(2)においては、(1)のごとき、「普通」の条件文における言語表現の有すべき線条性の、前句に後句より旧情報、後句に前句より新情報という相対的新旧情報構造が逆転させられている事を知るのである。

四

かかる(2)における、通常の条件文に対する新旧情報の逆転の構造は、同様な「なり」文を通じて見出せる。以下に例証してみよう。

(6) としごろみ給ひなれにたればかうもあるなめり (161 P)

(7) いみじき雨のさかりなればをともしこえぬなりけり (252 P)

(8) 風のこころあわたゞしさに格子をみなかねてよりおろしたるほどなればなにごとといふもよろしきなりけり (302 P)

(9) くらくなりぬればまいらぬなり (176 P)

(10)中にはものしりゑにとんしたれば光ありて外のきえぬるもしら
れぬなりけり(304 P)

(11)いひをきしををそくいでくればかしこなりつるしていでぬればた
がひていくなめり(205 P)

(12)くじはてにたるところにつけてみゆるならんかし(289 P)

(6)は同母妹貞観殿登子にあてた夫兼家の手紙が、まちがって作者
の所にとどけられ、その文面を読んだので作者の感想である。「年来
親しく馴れておられるので、こうからかったような文も書送られる
のだ」(大系注)というのである。従って、後句「かうもある」は
前接文脈で紹介された兼家の文言を指すのであり、いわば、その前
文脈で読者も承知しているはずの内容をもう一度「かう」と一括言
表したものである。従ってこの後句は旧情報の繰返しと言えるので
ある。作者のこの文記述の意図(新情報性)は、その理由としての
前句の記述にある。事実、後句を省略して、
(6)としごろみ給ひなれにたればなめり
としてもほぼ記述意図は達せられる所である。

ただここで、以下のために断っておくと、第一にこの前句の新情
報性は、その内容自体に必ずしもあるわけではない。この場合も、
登子については数章段前から記述が継続しており、兼家といかなる
関係にあるかを承知している読者においては、前句の内容自体は既
知の事(旧情報)とも言える。この場合の新情報性とは、作者の記
述の意図に従って、後句に対する条件としてである。第二に後句も
この「かうもある」点自体は前文脈で得られた(と作者の考える)
旧情報であるが、後述のごとく両句が修飾関係にあるとすれば、前
句に条件付けられた後句という意味では、換言すれば前後句全体と

しての情報は、新情報であり得るという点については注意して
いただきたいのである(本論六節参照)。

(7)は、作者が夫恋しさのあまり手紙をやった所、そつとやって来
たという話で、来た事は「人はえしらず、われのみぞあやしとおほ
ゆる」情況であったが、それは雨がひどく降っていたからだとい
うのである。すなわち、後句は、「人はえしらず」という、すでに前
文脈で提供しておいた旧情報のいわば換言であり、その事を記述し
たいのではなく、その事の原因としての前句を新情報として伝
達せんとする記述なのである。従ってこの場合も、後句を省略して、
(7)いみじき雨のさかりなればなりけり
とのみしても、文脈的には通じる所である。

(8)は、前接文に「からうじておきいで、こゝには人もなきよし
いふ」とある。つまり、作者の養女との婚約をせまる右馬頭遠度が、
作者の所に直談判にやって来たのであるが、会いたくない作者は、
昨夜来きていた道綱を起して、ここには作者がいないうを言わせた
のである。折節風が強く、格子は前もっておろしてあって、中の様
子が見えないので、嘘言してもわからなかったと言っているのである。こ
の後句は「なにごといふにてもよろしき」の意味であろう。かかる
判断的表現は前文脈にないようであるが、前掲の「こゝには人もなき
よしいふ」という嘘言を平氣でした事を言いえ換たものと考え事
ができるのである。従ってこれも旧情報の繰返しと見る事ができ、
(8)風のこゝろあわたしきに格子みなかねてよりおろしたるほどな
ればなり

とのみ記しても、意味は一応通じると思われる所以である。

(9)は、兼家が法興院造営の現場(?)からの帰途、自分は寄らず、

使をもって作者のもとによこした消息の一部である。もう暗くなつたから寄らずに帰るといふ言訳である。後句「まゐらぬ」は「まゐらぬつもりだ」ではなく、「まゐらないのだ」の意味である。つまり、それは現に使をよこして本人が来ていないといふ事実を、作者が認知しているといふ前提に立って、その理由としての前句を提示したのである。従つて後句は、聞手——作者も認知している旧情報と言葉で繰返し確認した表現であり、伝言の主点は前句にある。

(9)くらくらぬればなり

とのみしても、一応通じぬ事はないのである。

(10)は、先の(8)の後、遠度と作者が会つた時の事である。作者は、遠度が帰る様子なので、几帳のほころびから見出すと、外の縁にともしてあつた火はとくに消えていた。内部のあかりで、外の火の消えていたのに気付かなかつたといふのである。この場合、後句は「外のきえぬるをもしられぬ」の意であるが、これは前接文の「簀子にとんしつる火は、はやうきえにけり」といふ情報提供の換言とみられる。しかし、「光ありて」は前句の条件付けの中に入るべきものと思われる。すなわち、「内にはものゝしりゑにともして光あれば」とすれば、条件被条件関係が分明となる所である。そして、かくすれば前句は新情報、後句は旧情報と言へるが、かかる例のごとく、必ずしも明確に新旧情報が「ば」によつて二分されていない場合もある。この場合も、

(10)中にはものゝしりゑにともして光あればなり
としても全く通じぬわけではないであらう。

(11)は石山詣の帰途、石山から打出の浜まで舟で帰る折、途中で迎へる舟に出会つた。迎へを依頼したのに遅い故、石山にあつた舟で

帰つて来たので、ゆきちがいに言つたといふのである。従つて後句「たがひていく」は、現実にはゆきちがになつていふといふ認識の上で立つて、その理由原因を述べたために言葉で確認したもので、旧情報の繰返しといふ意識で記述しているわけである。記述の中心(新情報性)は、理由原因を記述した前句にある。この場合前句は二句になつてはいるが、前者は後者の条件付けで、この二句全体が後句の理由付けとなつてはいるのである。

(11)いひをきしをいでぬればなめり

とのみしても記述の意図は達せられると考えられる所以である。

更にかかる「なり」構文は、八蜻蛉日記以外も考えると、「ば」での結合のみならず、「て・に」によるゆるやかな条件付けも見出せる。(12)は「て」の例である。これは、めつたに來ぬ兼家故、意氣消沈している作者の家に、火事の見舞に兼家を尋ねて來た高官に、「まゐりたりつるよしきこえよ」と言われた侍女が、「おもだたしげ」であつたと聞いた作者の感想である。「平生あまりにも願みられない所だから、よけいにそういう事にも得意げに思ふのである」(大系注)と言ふのである。従つて、後句「みゆる」は「おもだたしげなる」の換言であり、旧情報である。作者の記述の意図は、その理由を述べた前句にあるわけである。

(12)くじはてにたるところにつけてならんかし

とのみしても、文脈的に意味は通じるであらう。これに似た表現は、

(13)かれをみてな(る)べし(323 P)⁽¹⁴⁾
等見出せる。

以上、できうる限り様々の変相を示した。そして、いずれも、は

ほ前句Ⅱ新情報Ⅱ原因理由、後句Ⅱ旧情報Ⅱ結果結論という構造になつている事を論証したのである。それは必ずしも「ば」によつて明確に分割されていない場合もあり、新旧の情報判定も必ずしも客観的になし得るものではない。注(8)で述べたごとく、発話者(記述者)の発話意図をこの稿の筆者が解説しているのである。しかしともかく、右のごとき構造の故に、後句を省略して、その原因理由を示した前句のみをもつて、「――ばなり」という構文にしても、記述者の記述意図は一応達せられると考えられるのである。

五

さて、一般にかかる名詞以外に接続した「なり」文が、いかなる文法的構造を有するかは、先学も指摘し、筆者も指摘して来たる事、最初に述べたごとくであるが、一応改めて結論の要点を述べておきたい。

まず第一点は、この「なり」に上接する叙述は、全体として一つの句(筆者は「名詞十なり」に對比して「叙述句」と名付けた)として、名詞に接続する場合の名詞に對比すべき一つの名詞句(準体句等とも言われる)を形成しているのであった。その名詞句を形成すべき叙述の範囲は、実は極めて多様であつて、単純な認定規範はなきに等しいが、この点は本論でも例証するごとく、一応の定義を下せば、「なり」構文の諸特性を發揮していると考えられるひとまとまりであり、形態的に言えば、そのまとまりに「こと」という形式名詞を接続させて名詞句としてまとめて、「なり」に承接させ得る部分という事にならう。

第二点は、かく、この構文は「名詞十なり」に比すべき、いわば

準名詞文を構成するという事である。いわば上接の叙述は、「なり」に包み込まれる事によつて、「なり」を述語要素とする、一種の名詞述語文を形成するのである。

第三に、従つて「叙述句十なり」という形態(問題とする(2)(6)(2)等)は、述語のみから成立する文であつて、主語を欠くものという事になる。この名詞文を筆者は「指定表現」と名付けたが、この指定表現が元来指定の対象を主語とし、指定の叙述を述語として、「AはBなり」のごとき表現であると考えられる故に、

(14)いとかうしもあるはわれをたのまぬなめり(115P)

(15)れいのやうに心あわたゞしからぬは雨のするなめり(257P)

のごとく、本来傍線部分のごとき主語(指定の対象)を有してはじめて、言語情報として完結した表現となると考えられるのである。

第四に、そうすると、(2)等、主語の一文中对置されていないものは、省略と考えられるのであり、何故省略が可能かと言へば、前文脈にその主語に相当する部分が言表乃至暗示されているからである(と記述者Ⅱ発話者が考えている)。逆に言えば、普通の「なり」文は、前文脈に言表乃至暗示された対象(主語A)を、分析的に考察して、その叙述(述語B)をもつて「なり」文Ⅱ準名詞述語文を形成するのである。

第五に、右に「分析」と述べたごとく、かつて山口佳也氏が現代語の「のだ」文を目して、「××トイウコトハ○○トイウコトダ」という主述関係と言われたごとく、いわば「なり」に包まれた叙述句は、対象言表の「換言」とも言うべき関係なのである。その故に、中古文中の多くは、前文脈に記述乃至暗示された対象情報を事実として、その事実の存在理由(原因)を述べる内容で「なり」文を形

成しているのである（その「理由原因」であり得る表現法は様々であり得る事は前稿で述べた）。かつて宜長が「なりけり」の働きを、「上（主語||対象A）の事の由（存在理由）を解釈（分析）したるとき語（述語||叙述B）」のとおりにくく辞世（「カッコ内筆者注」と言った）ごとくである。

第六に、以上のごとき「なり」文の特性は、当然ながら「なり」によって生ずるので、(4)の「けり」等のごとく、「なり」に下接した助動詞は、「なり」のあり様を限定するのであって、「なり」をとびこえて、直接上接の叙述句に影響を与えるものではないのである。⁽¹⁹⁾以上のごとき「なり」構文の基本的構造・性格の上に立って、本論の条件句を承接する「なり」文を考える時、その構造・性格を演繹的に確定できると考えられる。

六

まず、既述のごとき、条件句承接の「なり」文において、後句に旧情報を配置できる構造的理由について考えてみたい。つまり、「普通」の(1)のごとき条件文においては、先引の山田氏の論のごとく、前句と後句はいわば二文の連結にすぎない故に、後句は前句に対してより新情報を配置するという、言語表現の線条性に自然に従っているに對して、「なり」構文化されれば、何故その線条性を停止して、新旧情報の配置を逆転する事が可能になるのかという問題である。この点については、前稿で論じたとほぼ同様な二つの理由が考えられる。

第一は、先述したごとく、「なり」に接続する事によって、前句と後句は一語で一つの体言に準ずべき名詞句を創出するという点で

ある。そして、それによって両句は一体となって一つの情報を創出することになるといふ点である。つまり、かかる句を形成するという事は、普通の叙述における二文の間に生ずる、時間の軸に沿った線条的情報の展開を停止するという事である。前稿で述べた「線条性の解除」である。これによって、少くとも前句と後句は情報価値の平等性を獲得するのであり、線条性の新旧情報の配置を逆転して、前句に新情報を、後句に旧情報を配置する事を可能にするのである。

第二に、かかる二句||二文関係から二句||一文構造への変形によって、両句の關係は「接続」の關係(山田氏の重文乃至合文的關係)から「条件被条件||修飾被修飾」の關係(山田氏の有属文的關係)へと変質する事になると考えられる。「ば」による形態そのものが保存されているという点からすれば、連用修飾の關係とも言えるが、全体として「こと」を補うべき名詞句なる点においては、むしろ「~による~なること」と言った連体修飾的構造といふべき關係となる。そのどちらにしても、前稿で論じたごとく、この修飾被修飾の關係は、情報の意義という点よりすると、後句の内容を前句が限定するという關係において、前句||修飾語の方が情報の中心となる構造なのである。例えば「美しき花^a」「とく走る^b」のbは、これを情報を中心としたいなら、必ずしもaを加える必要はなく「花」「走る」とのみ言えばよいので、特にaを加えるのは、かく限定||修飾した後に、bに情報価値が生ずるとき場合であると考えられるのである。従って、一般に被修飾語は修飾語に修飾限定されて、全体として新情報となればよい構造なのである。換言すれば、修飾關係は被修飾部分に旧情報を配置してもよい、旧情報の配置を許容す

構造なのである。別な言い方をすれば、日本語における修飾被修飾の関係は、全体として一つのまとまった情報の単位となるべきもので、その点で二者間における言語表現の通常の線条性における新旧情報の交替は停止せられる構造なのである。⁽²⁰⁾

以上の二点は、従って密接な因果関係にあるわけであるが、ともかくかかる要因によって、後句に旧情報を配置する事を可能にしてゐるものと考えられるのである。

七

次に、「しづなり」という形態を持った「なり」文は、一樣に既述のごとき構造を有する同一の構造文か否かについて、検討してみよう。

(10) 胸うちつぶれてさめたればおもひのほかにさなりけり (21 P)

(11) 五日よ中許に世の中さわぐをきけばさきにやけにしにくどころこ

たみはおしなぶるなりけり (20 P)

(12) このおさなき人いりね〜といふけしきをみれば物をふかく思ひ

いれさせじとなるべし (25 P)

一体、条件句全体が一つの名詞句——命題のごとく「なり」に包み込まれる事の意義——つまりかかる表現法をとる意義はいづれにあるのであろうか。もし(1)のごとく、前句に理由原因を、後句にその結果結論を述べるといふ、単なる因果関係記述文とするためならば、(1)の構文にすればよいはずである。従って、故意に(2)の「なり」構造を採用するというのは、述べて来たごとく、前句に新情報を置き、後句に旧情報を配置して、その原因理由を述べた前句を情報の中心にするという、(1)の持つ線条性を解除し得るからだと判断して

よいであろう。従って逆に言えば、そのような情報構造を有していない場合は、問題とする「なり」構文でないと判定してよいであろう。かかる規準をもつ時、前掲例はいかがであらうか。

(10)は、先の(7)の直前の記述である。すなわち、これの前接文は「くらう家にかへりて、うちねたるほどに門いちはやくた〜」である。はつとして目を覚ましたら、意外にも夫兼家が来ていたというのである。後句の「さ」という指示語は、前文脈の内容を指して旧情報の再述のごとくみえるが、そうではなく、「夫が来た」事の艶曲表現である。また前句と後句の関係は偶然確定であつて、前句が後句の原因理由を記す関係ではない。つまり後句は前句に対して、それとは必然的関連を持たぬ事柄を述べて、より新しい情報の提供となっているのである。いわば普通の文と文の線条性に従つた情報提供となつてゐるのである。つまり、普通の線条性の新旧情報の、逆転にはなつてゐないのである。従つて、この二句の関係は既述のごとき「なり」構文の情報的構造を有していない事が判明するのである。ここは、前句を受ける「ば」の後に「門いちはやくた〜」乃至「そは」のごとき主語を補つて後句に對置させるべき構造であると考えられる。つまり、「なり」に包まれる名詞句を形成しているのは後句のみと考えられるのである。

(11)は、この記述のみで日記の一章段をなすのであつて、いわば全情報である。従つて後句が旧情報の繰返しにあらざる事は明白である。また前句と後句の関係は偶然確定であつて、前句が後句の原因理由を提示しているわけではない。つまり後句は、前句に対して必然的関連を持たぬ、前句に対してより新しい情報の提供となつて、普通の文と文の間における線条性を保有しているのである。線条性

を否定する新旧情報の逆転は起っていないのである。すなわちここにも、前句を受ける「は」の後に、前句の内容を要約して、「世の中さはぐは」乃至「そは」のごとき主語を補って後句に配置させるのが適当な、後句のみによる「なり」述語文を形成していると考えられるのである。

(9)は、鳴滝にこもった作者が物思いやまぬにつけて、「はしのかたにいでてながむる」故、息子道綱が「いりねく」といふ。それは作者に物思いをさせまいというつもりなのだと思つたというのである。かく、この後句の息子の言葉に対する作者の解釈の内容は旧情報の繰返しではない。また、前句が後句の原因理由を提示しているわけでもない。逆に後句が前句の理由を提示してより新情報たり得ているのである。従つてこゝも、普通の線条性を否定する新旧情報配置の逆転は起っていない。こゝも、前句が後句の「なり」述語文の指定の対象 \parallel 主語の内容に相当しているのである(その故に後句が前句の理由となつてゐる)。従つて、前句を受ける「は」の後に、前句を再述した「いりねく」といふけしきは「乃至」「そは」なる主語を補つて、後句のみで形成する「なり」文に設置させれば、指定表現が完成するのである。

以上のごとき検証方法によつて、「なり」構文を形成する条件句か否かを判定し得ると考えられるのである。

八

最後に、それでは何故かく積極的に後句に旧情報を配置する「なり」条件文を構成するかについて考えてみたい。

先述のごとく、一般に名詞以外を承接する「なり」文は、宣長の

言うごとく、前文脈の内容の原因理由を述べる関係になつてゐる場合が多いのであるが、本論で問題とする条件句を承接する「なり」文はまさしくそれに相当する。(9)(10)等も明白であるが、

(9)なかごろなきさまにもてなすもわびぬればなめりかし(281P)
などは典型的である。主語 \parallel 理由付けの対象が同一文中に配置される(4)(5)や、(6)も同様である。しかし、かかる理由付けの対象

が同一文中に配置されず、前文脈中にゆだねられてゐる場合は、例えば(9)~(10)等のごとく、この理由部分の提示のみでは、前文脈のいずれの内容を対象として理由が述べられてゐるのか、明確でない場合も多い。そのような場合、その対象内容の肝要な部分のみでも取り出して、「くだから」なのだ」の傍線部分のごとく、理由付け部分に対する結果結論提示の形で対応記述すれば、その心配は解消する(同時に、旧情報を「換言」する事によつて、旧情報の別の側面を補足し得る事に注意)。それが(2)をはじめ(6)~(10)の例と考えられるのである。後句がいずれも旧情報の再述である所以である。例えば(2)は、既論のごとく、前文脈に直接後句の「しるしをく」という記述はないのであり、後句を省略した(2)のごとき表現ではいかなる事柄に対する理由付けか、多少迷うであらう。そこで後句に、その理由付けの対象内容「身の上をのみする日記にしるしをいた」という情報の肝要な部分「しるしをく」を補つて条件構文を形成したので(2)であると考えられるのである。従つて、この(2)の「なり」文を、一文で情報が完結するように主述対置して提示すれば、
(2)身の上をのみする日記にしるしをくはかなしとおもひいりしもた
れならねばしるしをくなり
となる構造と考えられるのである。

しかし、これでは傍線部の重複感はまぬかれぬ。そこで、主述対置されて、理由付けの対象の明白な場合は、(19)のごとく(14)も同様)述部の傍線部が省略される事となるのである。

注

(1)所謂「終止なり」に対して、「連体なり」の判別は必ずしも容易ではない。本論でも、一応北原保雄氏の示された(a)「終止なり」∨「連体なり」∨「国語と国文学」43の9、b「なり」の構造的意味「国語学68等」基準による。なお、以後「なり」とはすべて「連体なり」である(「名詞十なり」も含む)。

(2)注(1)北原論文の他、大木正義「連体なり」とその上接句との構文的関係」∧佐伯梅友博士古稀記念国語学論集∨、田島光平「玉の小櫛『なりけり』の説」国語と国文学昭46・2等。

(3)「連体なり」構文の構造」国文学攷103、「主述句を承接する『連体なり』構文の構造」(九月末現在未上梓)、なお前者を「先稿」後者を「前稿」と称する。

(4)岩波日本古典文学大系本により、その頁数を記す。

(5)適切な用語でないが、かかる文を一般に「条件文」と称するに反りならつたものである。

(6)「しるしをく」は作者自身の動作であり、「終止なり」とは考えられない。

(7)∧改撰標準日本文法∨544P

(8)「情報 information」における、新旧情報の区別については前稿の注を参照いただきたいが、端的に言えば話手の判断によつて、すでに聞手にも承知されていると考えられる情報が旧であり、

まだ承知されていないと考えられる情報が新である。勿論聞手の側から新旧を判定する場合も考えられるが、本論では考慮の必要がないと考える。以下筆者の新旧の判定は、∧蜻蛉日記∨の作者の意図を汲んでという事になる。

(9)「おもひたつをたむむ月にと」は重複誤写とする説(大系等)もある。

(10)∧日本法学概論∨1080P

(11)本来「ば」は「は」から成立したとすれば、かく割切る事は歴史的には問題もあるかと思うが、本論は中古語の場合に限定する。

(12)「線条性」という概念を構文論に援用する事には問題を感じる人もあるかと思うが、前稿でも論じたごとく、所謂文の構造的にも線条性を前提にして成立しているものと考へたい(注20参照)。

(13)この点で確認しておきたい事は、先に筆者の論じた(「らむ」構文における原因理由推量のメカニズム」比治山短大紀要18)「らむ」構文で、「らむ」が原因理由推量——すなわち前句のみを推量するとき効果を生ずるためには、前句が係助詞によつて後句に修飾格として結び付けられていなければならぬ事を論じたが、それは基本的に、普通の条件文が、かかる情報の線条性を備えているからと言える。すなわち、「らむ」が前句のみを推量するとき内容文になるためには、後句が旧情報でなければならぬが、この普通の形態ではそうあり得ないからである。後句に旧情報を配置し得るためには二句∥二文構造の普通の条件文が係助詞によつて一文構造に変形され、前句が後句の修飾格にならなければならぬのである(本論六節及び注20参照)。韻文における例外等については改めてその理由を考察したい。

(14) この文は注(2)田島論文で「はさみこみ」とされる例である。
(15) 先稿参照。

(16) 注(1)北原 a 論文参照。

(17) 『のだ』の文について「国文学研究 56

(18)(19) 注(2)田島論文参照。

(20) 言語の「線条性 (lineal order)」と「構造性 (structural relation) 乃至 syntactic relation」の情報関係について、色々注釈をぬぎにした端的な筆者の見解を示せば次のごとくである。

言語表現においては、文と文の関係は勿論、句と句、文節と文節の関係においても、時間の制約による発話内容の線条的展開という事態が生ずる。そしてもし、言語活動が情報を伝達する活動であり、聞手の未だ知らない(と話手の判断する)情報⇨新情報を伝える事にその意義があるとすれば、時間的により前の言表内容がより旧情報であり、より後の言表内容がより新情報であるべきである。しかし、一方で言語は構造性を有している。これを「文」という単位で考えた場合、日本語では、主述関係においては、主語が前に述語が後に言表され、修飾関係(所謂目的語・補語等の関係も含めて)においては修飾語が前に被修飾語が後にという連辞関係乃至統語関係を有している。主述関係の場合は、端的に言えば問と答の関係であるが故に、構造性はそのまま線条性の新旧情報の交替に合致するのであるが、修飾関係の場合は、被修飾語は修飾語に修飾限定されて、一体として一つの新情報であればよい故に、被修飾語が修飾語より前にすでに提出された情報(旧情報)の繰返してある事を許容する。例えば「どこに行った」

という質問に対して「学校^aに行った^b」と答えた場合、bは聞手(質問者)もすでに承知している旧情報の繰返してである。しかし、aに修飾限定されたbという意味では、いわばa b総体の情報としては新情報であり得る。従って、かかる場合は、言表の線条性に伴う新旧情報の通常の交替ではない事になる。

なお、筆者は日本語の文の基本形を「(修飾語+被修飾語) + 述語(修飾語+被修飾語)」と考えているが、これ等の観点から、二文構造か一文構造か、主述構造か修飾構造かを判別する事もできると思われるのである。